

14. 飯田保健所管内における結核の現状について

長棟美幸、宮島里美、安川照人、田中由嘉里、白上むつみ、西澤志帆（飯田保健所）、

赤澤春菜（諏訪保健所）、佐々木隆一郎（飯田保健所）

キーワード：結核、介護福祉施設、医療従事者、潜在性結核感染症

要旨：飯田保健所管内での平成 23 年度の結核新登録患者は、11 人であった。このうちの 70 歳以上の患者では、高い確率で介護福祉施設を利用しているという特徴がみられた。また、患者に関わる介護福祉施設従業員と医療従事者に潜在性結核が多くみられた。保健所では、対象地域で結核予防意識を向上させるために、行政、施設関係者を対象とした結核対策検討会を開催した。施設職員など関係者間で、施設の短期利用者を含めた高齢者の結核検診の重要性を共通認識する事が出来たと考えている。

A. 目的

飯田保健所管内における平成 23 年度結核新登録患者の特徴を明らかにする。

B. 方法

検討対象者：平成 19 年～平成 23 年の結核新登録患者とした。

C. 結果

(1) 図 1 に、平成 19 年から 23 年の結核新登録患者数と罹患率を示した。平成 21 年の結核新登録患者数

は 31 人（18.2/人口 10 万対）で最も多かった。

(2) この間の結核診登録患者について、年代別に見ると、70 歳以上が 57.3% で多かった（図 2）。

(3) 図 3 に活動性分類別の新登録患者数を示した。平成 21 年までは喀痰塗抹陽性患者の方が喀痰塗抹陰性患者より多かったが、平成 22 年、23 年は喀痰塗抹陽性患者より喀痰塗抹陰性患者の方が多かった。

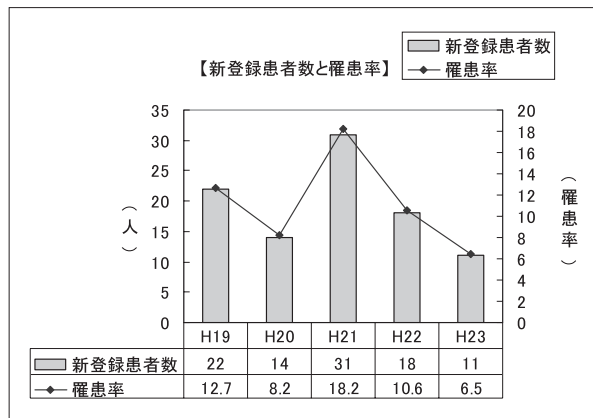


図 1 飯田保健所管内における 5 年間の結核新登録患者数及び罹患率

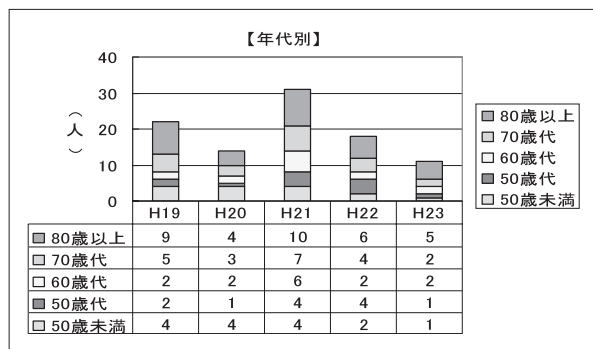


図 2 飯田保健所管内における 5 年間の年代別にみた結核新登録患者数

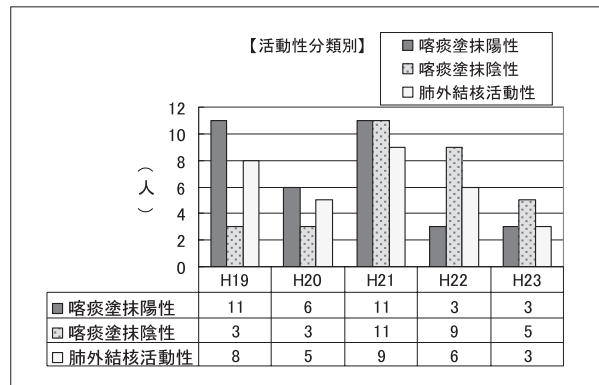


図 3 飯田保健所管内における 5 年間の活動性分類別にみた結核新登録患者数

(4) 平成 23 年の結核新登録患者の塗抹陽性、陰性、年齢分布を示した。管内の結核新登録患者は 11 人（男 7 人、女 4 人）であった。年齢別分布は図 4 に示した。即ち、50 歳以下が 2 人、60 歳代が 2 人、70 歳以上が 7 人であり、70 歳以上の結核新登録患者の割合は、全年齢層の 63.6% であった。

(5) 図 5 に、平成 19 年から平成 23 年の間の潜在性結核患者の属性を示した。平成 23 年は、介護施設従業員と医療従事者からの潜在性結核感染症が多いという特徴がみられた。

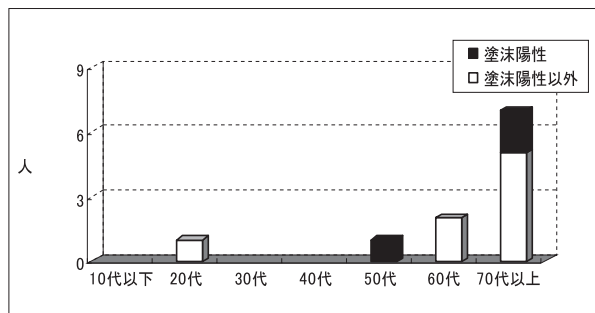


図4 飯田保健所管内の平成23年の結核新登録患者の活動性分布と年齢分布

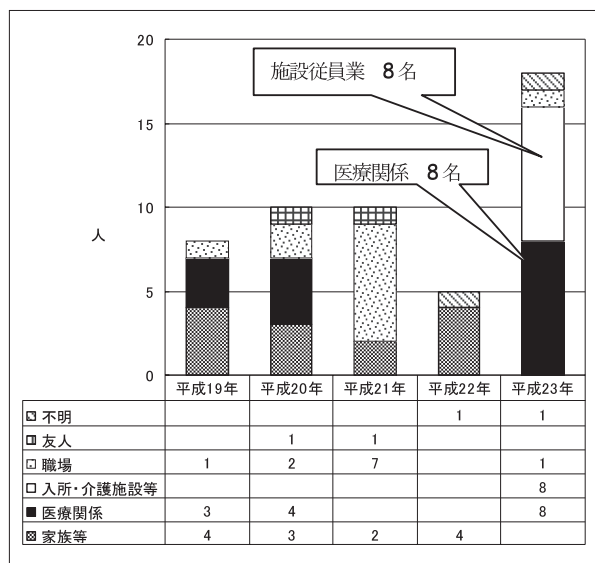


図5 飯田保健所における5年間の潜在性結核患者の属性

D. 考察

管内全体の平成19年～23年の結核患者の動向について図にプロットしてみたところ、管内の一部地域に限定して、多く発生していることが分かった。

結核患者が集中していた地域は、かつて製糸工場が盛んであった地域であり、生糸産業に従事している労働者が多く働いていたこととの関連が示唆された。

今回、介護施設利用者で、患者が多い傾向が見られた。特に、介護施設を短期間利用している要介護者に患者が多いことが特徴であった。一般的に、介護施設を短期間利用する要介護者は、いくつかの施設を、定期的に渡り歩いていることが多い。今回の患者でも、こうした渡り歩きの中で、結核に対する定期健診の受診がおろそかになっていたことが課題であった。

今回の塗抹陽性患者2例は、症状が出てから結核と診断されるまでの期間が4か月及び1年と長いことが共通していた。また、症状があっても、胸部レントゲン撮影での確認を行っていないことが共通していた。

このように、症状が出て、胸部レントゲンを受けていなかった理由としては、以下の点が考えられた。

- ①発熱は継続していたが、高齢者であったためか、結核に特徴的な咳症状が少なかったこと、
 - ②医療機関を受診又は往診による受診はしていたが、胸部レントゲン撮影を行う必要があると認められなかったこと、
 - ③施設を何か所も渡り歩いていたので、主治医が明確でなく、行政が行う定期健診を受ける機会を逃していたこと、
- 等の三点である。

保健所では、これらの課題を軽減するために、行政を含めた関係者に対して、胸部レントゲン検診などの結核検診を定期的に行うよう、結核対策検討会を開催し、お願いをした。

また、介護職員や医療従事者の中からの潜在性結核患者が多くみられた。そこで、施設職員を対象にした感染予防の研修会を実施した。

これらの対策で、対象地域において、どの程度結核の発生を防げるか、今後注視していきたい。

E. まとめ

今回の事例を振り返ると、要介護者が地域で当然チェックされている検診や医療を受けていない可能性が示唆された。今後、かかりつけ医や自治体と十分に連携を取り、定期的な結核検診の実施を行うことについての意義の啓発を含め、地域での結核予防における保健所としての役割の一端を、積極的に果していきたいと考えている。